

た。spe遺伝子保有の有無はPCR法で、PFGEに使用した制限酵素はSma I とSfi I である。患者28名は、10代を除き各年齢層にみられ、特に51歳以上が17例と中高年齢層に多発した。死亡例は16例(57%)と高率であったが、これは本感染症の実態があまり明らかでなく適切な治療法等が不明な時期に千葉県で多くの患者発生がみられたことが原因の一つと考えられる。28株のT型はT 1, T 3, T 4等9型に型別され、このうちT 1とT 3による事例が各8例と両血清型で約60%近くを占めたが、これは全国の発生状況と同じ傾向であった。これらの株のspe遺伝子保有状況をみるとT 1, T 3はA, Bを、T 6がA・B・Cを保有しており、他の型はB・CまたはB単独保有株という結果であった。この結果は咽頭炎患者由来株でも同様であった。PFGE解析の結果では、同じT型の株は患者由来株、家族由来株とも同一の泳動パターンを示した。また、患者株と同時期に咽頭炎等の患者から分離された株も、T型が同じであれば同じ泳動パターンを示す株は広く認められた。このようにspe遺伝子保有状況やPFGEによる比較では、劇症型A群レンサ球菌感染症由来株と家族由来株および一般臨床株との間に差は認められなかった。

**パッシブサンプラーによるホルムアルデヒドの測定について** 中山和好, 日野隆信: 第13回地方衛生研究所関東甲信静支部理化学研究部会 2001, 2, 23, 水戸市

ホルムアルデヒド測定用の拡散型サンプラー (スベルコDSD-DNPHパッシブサンプラー) の精度をポンプ法と比較して検討した。19採取地点での結果、サンプリングレートは48.8~110.0 ml/minの範囲であり、平均値は67.2ml/min, CV%は24.1%であった。気流の影響を受ける事が示唆された。

**GMP 査察同行及び収去検査でみられた試験法の問題点について** 加瀬信明, 矢崎廣久, 福島悦子: 地方衛生研究所全国協議会関東甲信静支部第12回理化学研究部会, 2001.2.23, 水戸市

平成11年度より県内医薬品製造事業所へのGMP 査察に衛生研究所職員が同行し、品質管理部門や試験室における適合状況のチェックや、収去品の検査を行っている。収去品の適否は承認規格の試験法によるが、承認時から見直されず現在の技術水準と合わないものもあり、平成12年度では11検体中4検体で試験法自体に何らかの支障がみられた。別に社内法により適否を判定しているケースが多かったが、試験法についても適宜改良、見直しが行われることが望まれた。

**Morphological characterization and molecular typification based on mitochondrial cytochrome b gene analysis in G aflatoxin-producing fungi** Haruo TAKAHASHI, Li WANG<sup>1)</sup>, Koji YOKOYAMA<sup>1)</sup>, Nobuyuki KASE, Hirohisa YAZAKI, Masakatsu ICHINOE<sup>2)</sup>, Kazuko NISHIMURA<sup>1)</sup>: マイコトキシン研究会題49回学術講演会, 2000.7.7, つくば市

アフラトキシンB<sub>1</sub> G両群を産生するAspergillus flavusとA. parasiticusは分類学的に極めて近接した位置にあり、時折り形態学的同定が困難な場合がある。そこでミトコンドリアチトクロームbの遺伝子解析から類別した。その結果、供試のアフラト

キシシンB<sub>1</sub> G産生A. flavusは、A.bombycis, A.nomius, の2種に類別され、A. flavusは見出されなかった。また、供試のA. parasiticusはわずかに塩基配列が異なる2群に分かれたが、いずれもtype culture とは異なる一群を形成した。この様に、アフラトキシンB<sub>1</sub> G産生菌群は多様なDNA type からなることがわかった。

1) 千葉大学真菌医学研究センター 2) 東京家政大学

**イランにおけるピスタチオナッツの生産状況** 高橋治男: マイコトキシン研究会第50回学術講演会シンポジウム, 2001, 1.10東京都

近年、イラン産ピスタチオナッツのアフラトキシン汚染が大きな問題となっている。2000年9月にイランのピスタチオナッツ生産地を視察した。ピスタチオナッツ畑から採取した落下果実にAspergillus flavusの集落が認められ、early split果実への汚染源となっている可能性が考えられた。したがって、アフラトキシン汚染を防ぐには、農園での栽培から収穫後の乾燥、製品貯蔵に至るまでの全工程での衛生管理が重要と考えられる。また、現地でもアフラトキシン汚染の軽減に取り組みがなされているが、特に日本向け製品は収穫、乾燥、製品に至るまで、改良の跡が見られる。実際それらが有効であるかは、今後の結果を見る必要がある。

### 3. 著書 (抄録)

**環境化学物質の最新計測技術** 日野隆信 (分担執筆), 宮崎 章 (監修), リアライズ社, 2001.

大気汚染・水質汚染・土壌汚染で、現在、問題となっている化学物質の分析法に関する情報提供を行った。著者は、水質関連汚染物質/工場排水/揮発性有機化合物を執筆した。